

・先住忌

長秀院十八世中興透宗憲一大和尚

(渡辺 憲一) 十七回忌

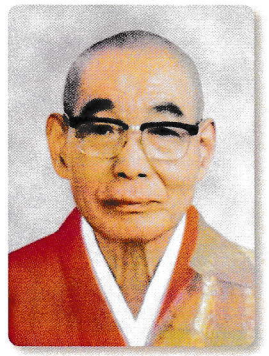
・寺族忌

秀慈院心源貞道禪尼上座

(渡辺 三ノ) 五十回忌

令和七年十二月六日

田澤山長秀院



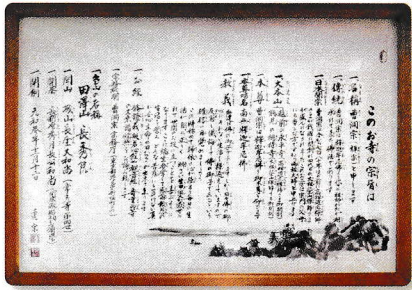
十八世透宗憲一

大和尚は、五十七歳のときに、小学校教員を「なんだかくたびっちゃな」と言っ

て退職した。シベリヤ抑留から帰って代用教員として地元の清沢小学校に奉職し、その後金谷川小学校、大森小学校の三校でつとめた。

四十代から特別支援学級を受けもち、それが自分の専門性となっていた。年齢的に限界を感じ定年前に退職した。未だに「憲一先生懐かしい」と言っ

てくださる方々がいて有難いと思う。
六十代になると母親ミノの持病であった「特発性心筋症」を発症し「法衣が重い。お袈裟が重い」というようになり、六十七歳のときに脳梗塞を発症し寝たり起きたり、入退院を繰り返すようになった。七十歳で長秀院住職を退董した。平成十八年十一月



一日遷化、入退院を繰り返した晩年であったが、数え八十四は長生きできたと改めて思っている。自分も古稀を越えているが、間もなく退董しなければと思っている。
憲一大和尚は、書と絵が好きであり、特別支援

学級の指導にもそれらを用いていた。書は、ご本寺常光寺玉木慧祥老師にご指導を受け、斎藤芳龍先生たちと「芳龍書道会」で動しんでいた。書に関しては、「毎日書道展で入選したのは常光寺様のお陰だなあ」とよくいつていた。絵はクレヨン・クレパス画が好きで中々見事だった、絵に関しては現在は何も残っていない。ただ、五十代の終わりに「曹洞宗の宗旨」をかいたものが残っており、現在の庫裡玄関に掲示してある。本人も「印刷物よりは書いた方がよいな」と一応満足していたようである。

「芳龍書道会」において書道教育にも熱心であり、師範方の仲間が多かった憲一大和尚は、息子にも熱心に指導した。私も小学校三年生あたりまでは素直に課題に向きあって、月何度かの提出も真面目に行っていた。しかし、四年生頃になると外で遊ぶことが楽しく書道の課題練習がイヤになっていった。小学校五年生の夏休み、憲一大和尚は課題の手本を書き、それを机に置いて学校に出ていく。私はその課題手本を練習する。一番自分で良いと思ったものを机に置く。学校から帰った師匠がそれを点検する。これが一ヶ月の課題の清書までの経過である。その日も課題が置かれていた。朝に書いていったものがある。とにかく清書しなければならぬので書いていないのだが、夏休みは外で遊ぶことが楽しくて仕方がない。机に向かい、暑さで汗がタラタラと垂れる。早く外に出たい一心である。悪知恵が働き、手本の上に半紙をのせ、ナゾる。あたりまえであるが

字形は整う。うまく出来たと自分でも感心する(ナゾったのだから手本に近い形となるのは当たり前である)。そのまま清書として、机の上に置き、外で遊び呆ける。夕方帰宅した師匠が、清書を手に取り見た瞬間、いままで見たこともない険しい表情になる。元来三年に一度ぐらいしか怒らない人であったが、とても怒っているのがわかる。険しい表情で一言、「こういうことをする人間はダメになる！」と。こどもの浅知恵で「何故バレたのか？」としか思わなかったが、それ以来一言も口をきいてくれなくなり十日程経った。

「手本に紙をのせ、ナゾったのはすぐわかるんだ。書道は自分を磨くんだ。ズルをするのはダメだ」、本当にオツカない顔であった。

中学でももつと真面目にやれば良かったと、未だに忘れられないことである。怒らない父が怒った経験は、白いご飯を残した時烈火の如く怒り、手が出そうになったことである。シベリア抑留の中で戦友が餓えて次々と死んでいった。「白いご飯が食べた」と死んでいった戦友たちの顔が浮かぶらしく、ご飯つぶを残すことさえ許せなかったのだと思う。
重い心臓病であったので六十七歳の脳梗塞以来は不自由なことが多かった。それでも数え八十四まで生きた。自分が古稀を迎え、父が感じていたことを追体験しているのかもと思う。いづれにせよ、自分の終え方も方向性を定め実行しなければと思っ



五十回忌を迎え
た祖母渡辺ミノは、
明治二十八年生れ
で松川町浅川の吉
田家から十七世の

もとに嫁ぎ寺族となった。

祖父渡辺活山（十七世活山祥圓大和尚）は田村町川曲の渡辺家の出身で菩提寺項宣寺にて出家し二十歳で長秀院へ入り当時病床に伏していた十六世のお世話をしながら継目（つぎめ）を託されたという。地域のこと知らず「乗り込み」の若い住職にとつて檀信徒の方々の様子もわからず、地元出身の祖母は頼りになることも多かったのかもしれない。

祖母が亡くなった折、本名がミノということを知って知った方も多かった。通称は「ミエ」または「ミイ」であったので、驚いたようであるが、かつて女性の名前は、諸事情で通称で通していたことが多く、現代人には違和感があるかと思う。

祖母ミノは家族の中では笑う人ではなかった。どこか昔の厳しさを持っていたと孫として思っている。地元の出身で（長秀院の檀信徒は田沢と金谷川地区浅川が中心）緊張感も常にあったのだと思う。また、昭和十八年五月に十七世は結核で遷化（亡くなり）し、十八世を継いだ憲一大和尚

は本葬を終え二十歳で住職任命の辞令を拝命その十八年秋召集令状を受け、ソ連と満州の国境で昭和二十年武装解除、そのままシベリヤ抑留となり、祖母にとっては叔父明義・睦夫が側にいたとはいへ苛酷な戦中戦後であったと思う。

祖母とのエピソードで忘れ得ぬことがある。

私が小学校五年生の冬の夕方のことであった。玄関脇の旧庫裡の部屋にいと石段を上がって行く靴音がきこえた。長靴で歩く音が玄関前で止まった。「あつ、お客さんがおいでになった」と思ひ、呼び鈴のピンポンという音が鳴ると思った。しかし、全く音が鳴らない。不思議に思い、玄関の戸を明けてみたが誰もいない。不思議に思い台所にいる祖母に「誰か来たんだけど、誰もいない」と言ってみた。祖母は、「本当に誰か来たのかい？」「うん、だって長靴の音だったんだヨ。んでも、ピンポン鳴んねがったし、誰もいないんだ」「ふーん、そうか。本当に誰か来たんだったら明日になつとわがっぺ」と言った。何が何だかわからない会話だったが、そのままになった。

次の日の朝六時半にピンポンがなり二人の男の人が立っていた。告人（つげと）である。「おはようございます。昨日〇〇さんが亡くなりました。おしらせに来ました。打ち合わせ宜しく

頼みます」

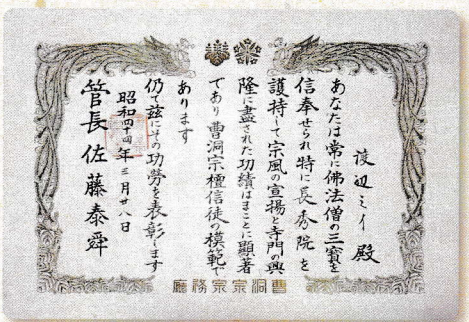
小学校に出勤前の父憲一が慌しく招き入れ話し合いとなった。

祖母は、「〇〇さんだったんだな。わがで来てくれて、お知らせしてくっちゃんだな」といって手をあわせている。よく理解できなかったが、そういうことかと合点したのを覚えている。

お寺と檀信徒は一体だったのだと思う。どういう風に理屈をつけても良いのだが、「わざわざわがで知らせに来てくっちゃんだない」と手を合わせた姿を鮮明に覚えている。

雑巾がけや掃除と一緒にやらせたのも、私が後継者であるということの一つ一つ手とり足りだったであろう。多くは私はただ遊んでいるだけであったが私にシン入れをしていたのかもしれない。口癖があり、「何でも三代目が大事なんだ。あんたはここの渡辺の三代目だから、しっかりとしらんしょ」耳たこの話なのだが、古稀の自分自身に今も残っている。

（祥文 拝記）



ご焼香賜り誠に有難うございました。
報恩感謝の日送りと長秀院興隆に
つとめたいと願っております。

田澤山 長秀院

十九世 智徳祥文 合掌

渡辺家一同